

# 清 教 主 義 文 学 と 聖 書

園 部 治 夫

## 序

歴史はよく清教徒のことを間違っただけで伝えている。しかし Macaulay 卿はそれを「恐らく世界の生んだ最も注目すべき人間の団体である」<sup>(1)</sup>と断言している。一方、Douglas Campbell は「現代における最大の精神力、政治力である」<sup>(2)</sup>とも証言し、また Carlyle も「実際のところ、外のどんな崇高な英雄的行為もこの世では恐らくなし得なかったほどのもの」<sup>(3)</sup>と確言している。清教徒はよく漫画化されたり、嘲笑されたりしているばかりでなく、その呼称は保守反動の同義語とさえみなされた。風刺家や劇作家は、彼らの奇癖の紹介に忙殺されていた。実際彼等は舞台毒舌家のいいかにもにされたのである。「彼等の誇示するような単調な服装、その不機嫌な様子、嗅みのある鼻にかかった声、ぎすぎすしたふるまい、食前の長い祈禱、日常会話にやたらにとび出す聖書のことば、学識に対する偏見、上品な娯楽に対する憎悪感等、全てが嘲笑的となった。しかし歴史哲学が学ばなければならないのは、その嘲笑者たちからだけではない」<sup>(4)</sup>と Macaulay は付言している。

### 1. 誤解された清教徒

清教徒の欠点や弱点が何であっても、彼等がもし無視されていたなら、歴史は必ずや書きかえられたに違いないだろう。彼等は重要な職責を全うするために強力な人物が必要であった時代に生を受けていた。もしも彼等が厳格で粗野で頑固であり、その神学が時には常規を逸したものであ

り、不合理なものであったり、またたとえその行為の規準が奇妙な程超俗的なものであったとしても——それでもやはり、神は彼等をその聖き場所に堅く釘でうちつけ給うたのである。それほど彼等の使命は重大なものであった。だから、彼等の施した恩恵は全人類に及んでいるといっても過言ではないだろう。この世における信教の自由、公民の自由を確保するための機能を有する人間であれば、二、三の奇行なら許容もできるし、またこの世の民衆の運命を神の統治によるものと定められた人に対して懐く失望にも耐えられるのである。<sup>(5)</sup>

大西洋の兩岸の英語国民の間において今日見られるような普通教育に対する熱意は清教徒の遺産である。ニューイングランドの校舎についていえば、Lowell はそれを美しく画いて、「四つ角の中央の森の中にあり、この小さな建物や、それに類するものはニューイングランドの創設者によって発明されたとりでの原型——わたしたちの清教徒の祖先たちによる大きな発見——であった」<sup>(6)</sup> といっている。Hazlitt もいっているように、「もし我々の文学が、一様には美しくなくて、概して重みのあるゴシック式のもの」<sup>(7)</sup> であるなら、その力となっている多くが、起源も形態も清教徒風であるといわなければならない。

清教徒には<いとすぐれた力>を見抜く強い感覚があったからこそ、衆人の中にあっても卓越性が発揮できたのである。もしこれが一面において大きな自己嫌悪をひき起したものであるならば、他面では強力な確信と勇気とを与えてくれたことになる。神が、真理と正義と自由を求めて戦う人間とともにいましたもうということをはたすら確信しているものたちは、いかなる争いの中にあっても人間の弱さを示すようなことはなかった。奇行はあったかも知れないが、清教気質には、一種の高潔さ、崇高さがあり、それは行儀正しさ、まじめさ、崇高以外の何ものでもない一種の精神的、靈的力の発動であった。

## 2. 聖書によって育成された清教徒

### a. 旧約聖書の評価

清教徒は聖書によって育成された。<sup>(8)</sup> 聖書は彼等の血となり肉となり、その信仰と想像力を養う食料となり、また高遠な理想と大きな努力をひきだすためのつきない源ともなった。特に清教徒に思想の映像と規準とを提供してくれたのは旧約聖書であった。その圧制者に対する抵抗と戦闘の記事、荒野のさすらいの記録と、神の光りと導きの記録とは、真に彼等の心をとらえた。旧約聖書は約束の土地を約束の日に待ち望む人々にとっては実に生きた書物であった。

彼等は聖書にある紛争と聖書の勝利に関して考えた。「聖書の英語訳はかなりの程度ユダヤ化したもの—— 英国人的精神ではなく、清教徒的気質—— になってしまった。…… アマレクやペリシテを荒野で会った人々の中に見ることは好つごうであった。そして一つは理解できないつの笛（キリストの象徴）であり、他の一つは野獣（キリストの敵）であった」<sup>(9)</sup> Cromwell はある身内のものに送った手紙で次のようにいっている。「私はメセク<sup>(10)</sup>に住んでいる。それは<長びかせる>の意味である。またケダル<sup>(11)</sup>に住んでいる。それは<暗黒>を意味する。しかも神は私を見捨て給わない。神は長びかせ給うけれども、必ずや私をその幕屋に導き給う」と。これは旧約聖書の用語がいかに清教徒の気質に適合しているかの模範例である。Macaulay もいうように、清教徒がその子供に、キリスト教聖徒の名によらずに、ユダヤの族長や戦士の名によって洗礼を授けてもらった時、それは彼等の旧約聖書に対する評価がどんなに高かったかを証明するものであった。

### b. 詩篇による影響

とりわけ、彼等の心をうち、また彼等のすさまじい想像力を呼び起して即興劇を生み出したのは詩篇であった。「わたしたちが笛を吹いたの

に、あなたたちは踊ってくれなかった」<sup>(12)</sup> という聖句が分からなかったとしても、ダビデのことばの「わが岩なる主はほむべきかな。主はいくさをすることをわが手に教え、戦うことをわが指に教えられます」<sup>(13)</sup> は、彼等には少しも難かしいものではなかった。「Miltonの詩や Bunyan の精神史には、詩篇の力が特徴となっははっきり表われている。その影響はあの厳格な宗教の最強の型である清教改革の騒がしい時代にその時代の先駆者として立ち、名声と幸運の絶頂を極めた Oliver Cromwell の生涯に更にはっきり表われているのである。彼が詩篇で読みとった精神は、その波乱に富んだ生涯に起った危機の度毎に彼の行動を左右したのであった。彼の生涯で最も活躍した舞台に用いられたのが詩篇の引用であったことは特記すべきことである。その私信にしても、公文書にしても、議会演説にしても、形象にしても、比喩にしても、その口からでることば、書く文章には詩篇の語句が用いられていた。それはあたかも絶えず瞑想することによって自分の言葉使いを自分の生活そのものの一部にしているかのようでもあった」<sup>(14)</sup> と Prothero は記している。ダンバーの合戦の朝、太陽がアベイ会堂の上端に昇った時、Cromwell はダビデのいった言葉を使って勝ち誇って叫んだ。「神よ、立ちあがってその敵を散らせ」<sup>(15)</sup> と。

当時から年代を隔てた今日において、聖書に関して英国ではどのような変遷があったかを詳細に調べあげるとは困難なことである。ウィクリフ時代の騎馬義勇兵が英文による使徒書簡数篇を得るために、ほし草一車分を喜んで提供した時からはそんなに長い年月は経っていなかった。しかしその期間に英国は聖書で充満してしまった。「清教徒は市場に行くにも、仕事場に行くにも聖書を携えてゆき、商買する際でもその言葉を口に出したり、心の中でとなえたりした。彼等の生活のいたるところで、その指導者となってくれた。武器をとらなければならなくなった時、彼等は手に神の剣とギデオンの剣をもち、ダビデの詩篇を歌いながら敵にたち向った」<sup>(16)</sup> 。

c. 国民生活に生かされた聖書

版を重ね、訳を改める度に英国人の生活に与えた聖書の影響は大きなものとなっていった。エリザベス朝時代だけでも 130 種以上の聖書（新約・旧約）が出版されており、そのうち約 90 篇は「ジュネーヴ版」で、それはいずれも家庭版か、小型のハンディな普及版であった<sup>(17)</sup>。これは年間平均 3 版の増版を要したので、英国内のプロテスタントの各家庭にゆき渡ったものと思われる。それ故清教徒時代の社会情勢を考える時、聖書は既に国民の間に充分浸透していたことは明白である。しかも英国人が国をあげて聖書を所有しているという新鮮さは決してすり減らされてはいなかった。それはエリザベス朝時代及びそれ以降の人々にとって新鮮な本であった。実際、当時の平均的英国人にとって、自由に入手できる唯一の文学書であった。もしも聖書を通して行なわれていた共同社会の生活のことを考えてみると、清教主義と神の言葉との関係を高く評価することは決して間違った態度ではないだろう。「彼等は神の御業（みわざ）をなすべきであった。それをなすために彼等は神の意志を知らなければならぬ。しかもその意志は、聖書の中に示されていた。人生の目的は義務を果すことでその法則は聖書にある。英国を革命化し、大西洋を越えてニューイングランドを見出したのが清教主義の基調であった」<sup>(18)</sup>。

「過去 250 年間に西欧諸国語で書かれた一冊の本は、その期間の初期に読まれていたあらゆる本より大きな価値がある」<sup>(19)</sup> という Macaulay の陳述書に明示されていることばを了解するためには、その間の事情ができるだけ明瞭にされていなければならない。歴史家 Macaulay は英語聖書の影響のことにはふれていないが、この陳述に規定されている期間こそ、英語国民にとっては、自国語の聖書を完全に所有していた時代であったということは注目すべき事柄である。清教主義は多くの法外な行動を世に残した。それは数多くの強勢法のあやまちを犯した。それにも

かかわらず、それは英国人の生活の基礎を完全に聖書の上に置くことに成功した。それはまた英国精神に神の言葉を十分に浸みこませることができた。清教徒たちは聖書の教えを間違えて受け入れていたことが多くあったかも知れないし、また強調する箇所をよく間違えたかも知れない。しかし、同時に聖書の力は彼等の中に、彼等を通して、また彼等から湧きでていたのである。

d. 清教徒の神秘性とその潜勢力

清教徒をその聖書から度外視して考えることは、歴史と論理の両方を冒瀆することである。彼等にとって聖書は、神の实在と力とにより、予言者的豪胆さと幻影とにより、意志と勇気の命令とによって大書されたものであった。自由は彼等にとっては決してありきたりのものではなかった。それは神の心から湧きでたものであった。彼等は常に<永遠の真理と人間の運命>に面と向っていたという意味では神秘論者であった。しかし、彼等の神秘説には実用価値があった。つまり彼等は精神界の問題に直面していると全く同様にその時代の問題にも直面していたのである。

あの華やかなエリザベス朝時代は、この世に信仰と冒険の強大な伝統を残した。それは大部分が清教徒の遺産であり、そしてこの世は、今日では、清教徒によって培かれた英雄主義と精神的冒険を通して従来に勝る繁栄をみている。社会秩序としての清教主義はやがて衰微し、消滅してしまった。しかしそれは根強い潜勢力をもっていた。今日ではそれが高揚された崇高な思想の中や、拡大され、深められた思想の中に感じとられている。清教徒の手はいまだに、考えたり書いたりしようとする文人たちの上に置かれている。その奇行は既に視界から消えて長年月を経ているが、その力は未だに残っている。しかもその力は聖書を通して自分たちに取り次がれたものであった。

清教主義が世界文学に寄与した最大の贈物の一つは想像力という才能であった。Macaulay 卿は、「たとえ 17 世紀の後半において、英国には利口な人間が多くいたかも知れないが、抜群の想像力を有していたものは、僅か 2 人のみであった。その 1 人は“失樂園”の著者であり、あとの 1 人は“天路歷程”の著者である」<sup>(20)</sup> と天下に公言した。

### 3. Milton と聖書

John Milton は Elizabeth 女王死後 5 年に出生した。Shakespeare が亡くなった時は 8 才であった。彼はエリザベス朝の最良のものを受け継いでいた。彼こそは清教主義の典型そのものであった。Milton は清教徒特有の強烈さと情熱と、高度な精神的価値感と鋭敏な美的感覚とを有していた。そして彼自身も次のようにいっている。「もしも神がどのような人間の心にも精神の美しさを強度に愛するように教えこまれたのであれば、神は私にも当然それを教えられている」と。

Milton の中には清教主義の精華をみることができる。彼には厳格なところが多多あったが、また洞察力も想像力もあった。聖書を長期に亘って精読し、それに精通しているので、想像力という成果が得られたのである。清教徒時代を通して、聖書が英国精神に深く浸透していたからこそ建設的文学の新生が実を結ぶようになったのは当然のことである。

Wordsworth が主張したのは、英語聖書を主食として育てられた素朴で、無学な者たちでさえ、詩をものするに当っては、特に詩語としてふさわしい活潑な堂々たることばを除々にではあるが獲得するに違いないということであった。Bigelow 紙によせた手記で Lowell はくたくましくて表現豊かな聖書の用語は清教主義の性格の一部になってしまったことを指摘している。<sup>(21)</sup>

清教主義が世界の政治・宗教の上に印した足跡は強大なものである。しかも Lowell も指摘している通り、その最大な記念碑は Bunyan の散文

と Milton の韻文である。<sup>(22)</sup> 清教徒は聖書の語法を探求するに汲々として  
 いるようなあやまちを犯したかも知れない。それにもかかわらず、その  
 耳や心は、聖書の真音を聞くために開かれていた。彼等の中には Milton  
 のもっていたような偉大な創造力の到来に備えを怠らなかつたものもい  
 いた。もち論、彼の文学への貢献は明らかに聖書の助けによるものであつ  
 た。というのは、Milton は古典劇の型を踏んではいたが、その靈感のも  
 とになったものはいうまでもなく、その作品の資料のもとも全てが聖書  
 に由来したからである。

清教徒の特徴であり、しかも神の特性と聖書の権威に関して強い確信  
 をもっていたことから生じた正義感に対して懐いた強烈な願望は Milton  
 自身に絶えずつきまとい離れなかつた。Milton の初期の意図は、その  
 主要詩作にロマン的な題目を与えることであつた。このために彼の手許  
 に置かれたものは、キング・アーサー物語りであつた。しかし長ずるに  
 及び、聖書の要求が益々執拗に彼をとらえたので、彼は罪によって人間  
 が知つたものと、救いによって永遠に獲得したというすばらしい物語り  
 を詩で書き表わすことによって“人間に対する神の道を正当化しよう”  
 と決心した。結果はまぎれもなく、英国の天才がこの世に送つた叙事詩  
 という最大の貢献をしたことになつた。聖書がこの不朽の名詩に動機を  
 提供したに違いないという証拠は、英国史上、その作品の占める地位が  
 いかに重要であるかをみれば分かる。Milton は“Paradise Lost”の開巻劈  
 頭に聖書を取りあげている。

Of man's first disobedience, and the fruit  
 Of that forbidden tree, whose mortal taste  
 Brought death into the World, and all our woe,  
 With loss of Eden, till one greater Man  
 Restore us, and regain the blissful seat  
 Sing, Heavenly Muse, . . . (23)



彼は失樂園のこの冒頭の言葉の中で、広汎な想像力で、読者を「創世紀」から「ヨハネの黙示録」にまで導いてくれる。

Marthew Arnold は、自分で定義を下した〈莊重体〉を代表する第一人者に Milton を選んだ。また彼によれば、この文体を作ったのは偉大な古典文学の典型による影響であるとし、その古代の遺風は彼の詩行の中に脈々と流れていると指摘した。批評家たちは、Milton の壮大な文学力の源泉を分析するのに莫大な紙数を費しているながら、彼の全生涯が、その思想を刺激するばかりでなく、表現形成をも構成している聖書の雰囲気の中で過されたという事実を述べたがらないのを決して論外のこととして見過してはならない。それと同時に、Milton の〈莊重体〉が古典作家を模範としていると全く同様に聖書をも模範にして形成されているという証拠をも見逃してはならない。聖書の用語と挿話は、“Paradise Lost” のいたるところに見出すことができる。

Meanwhile

The world should burn, and from her ashes spring  
New heav'n and earth, wherein the just shall dwell.  
(24)

x      x      x      x      x      x      x

The stairs were such as whereous Jacob saw  
Angels ascending and descending, bands  
Of guardians bright.  
(25)

このような適例は Paradise Lost に限られるのではなく、Milton の他の作品にもいたるところに散見できるので、例えば、Lycidas を開いてみてもそれは分かる。

So Lycidas sunk low, but mounted high,

Through the dear might of Him that walked the waves.

(26)

Miltonの音楽はイタリー文芸復興期のものであるが、それは唯、古典作品の典型的な音楽であるというだけでは充分ではない。Miltonの音楽にきかれる最も低い調べには神の言葉の響きがある。彼は自分なりの流儀で聖書の権威をとらえている。聖書のもつ壮重な威光や威厳にしても、また不可視の世界にあるものを知覚する鋭敏な洞察力にしても、いずれも、その作品中にさまざまな形で表われている。彼の言葉自体に精神力の強い鼓動が感じられるのは万人の認めるところである。聖書の思想と形象を長期間黙想してただけで、彼には自分のこの言葉を精神化し、変形化する力が生じたのであった。それは神の祭壇から聖火を受けた作家たち——自分たちで信じていたものもあるし、信じていないものもあるが——の顕著な特色である。

しかし聖書が、他のどんな作家よりもMiltonにより広大な影響を及ぼしているということは、彼のたくましい想像力をみただけでもうかがい知ることができる。〈天の戦い〉<sup>(27)</sup>に関して聖書に示された唯一つの暗示を、彼はその創造力に富んだ才能によって“Paradise Lost”の全構成の中に実に立派に集約させたのである。神と悪魔との間の一大闘争がこの清教徒Miltonの着想であり、その闘争はこの世界だけではなく、宇宙の悲劇をもかもしだしたのである。聖書を読み、その真意を理解したものだけがなし得る論戦をMiltonは舞台の上でなしたのである。彼の心を占めたのは、人類の上に襲いかかった思いもよらない精神的災難の問題であった。

What cause

Moved our grand Parents in that happy state,

Favor'd of heaven so highly, to fall off

From their Creator, and transgress his will. (28)

Miltonの答えは読者を想像上で〈人間の母〉が楽園で誘惑される以前の平和な時代に溯らせたのであるが、そのエヴァを誘惑したものの自体が誘惑に屈してしまった。

and with ambitious aims  
Against the throne and monarchy of God  
Raised impious war in heav'n, and battle proud,  
With vain attempt. (29)

これはMiltonの墮落の哲学である。すなわち人間の墮落は天使の墮落がその前触れをなしたのである。人類の反逆は天の戦と連結していたのである。

もち論Miltonはその墮落の一大叙事詩を一篇だけで終結はさせなかった。“復楽園”が当然の続篇になった。この続篇でMiltonは、十字架の話ではなくて、イエスの誘惑を実際に舞台にあげたのである。「次に悪魔は、イエスを非常に高い山につれて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せていった、『もしあなたが、ひれ伏してわたしを拜むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう』」<sup>(30)</sup>と。Miltonの想像力はこの言葉をとらえて復楽園の主題にした。もしも楽園が人間の不従順——それ自体は天使の野望と墮落から生じたものであるが——によって失われたのであるなら、楽園は人間の服従によってのみ回復することができるのであって、それはまた〈人の子〉が誘惑にうち勝つことに真の勝利があることを示したのである。

誘惑をうち負かしたキリストの勝利に関しては、どんなキリスト教界の牧師でも、Miltonがしたほどの強大な感化力をもった説教をしたものはないだろう。アテネやローマの栄光にしても、またパルティアの光輝でさえも罪のあがないという大目的から離れて救い主をよび求めるには充分とはいえない。徹頭徹尾誘惑された唯一人のものだけが人間の失なった遺産をとり返してくれる役目を果すことができた。

Now thou hast avenged  
Supplanted Adam, and by vanquishing  
Temptation, hast regain'd lost Paradise. (31)

x x x x x x

Hail Son of the Most High, heir of both worlds,  
Queller of Satan, on the glorious work  
Now enter, and begin to save mankind. (32)

Miltonの“Samson Agonistes”について J.R. Lowell は、英語詩で、これ——盲目の Samon を主人公としてギリシャ劇をモデルにした悲劇——に勝るものはないと断言している。<sup>(33)</sup>

Promise was that I  
Should Israel from Philistian yoke deliver;  
Ask for this great deliverer now, and find him  
Eyeless in Gaza at the mill with slaves. (34)

Miltonは Samson の屈辱的監禁と盲目——一種の感傷的自叙伝ともいえる——の機をとらえ、彼独特の手法で状況の劇化に手をつけた。自分自身で書いたこの作品の序文において、彼は劇芸術の型としての悲劇を弁護し、また舞台効果をねらい、清教徒同胞精神をもって書いたことを弁解している。この叙事詩は聖書に登場している人物やできごとから靈感を受けて書かれた数多くの劇作の先駆をなす勝れた作品である。

#### 4. Bunyan と聖書

##### a. Bunyan と Milton との比較

John Milton と John Bunyan ほど著るしい対照をなしている清教徒作家は他に想像することができない。しかも両者とも同様に神の言葉に依存し、また絶えず互に共有しなければならない文学的榮譽をも同様に担

っているのである。この兩名は 17 世紀における着想大胆な最大の詩人としてその名を連ねているが、二者中で劣者といわれた Bunyan の方が時の経過とともに優者といわれた Milton を凌ぐほど成長したのである。

Milton の「壮大なオルガンの響き」はすばらしいものではあるが、あの Elstow の鋳掛け屋 ( Bunyan ) — 予言者アモスの手法にならって自分自身を「私は詩人でもなく、詩人の子でもない。わたしは職人である」<sup>(35)</sup>と書き記した — の単純なきどらない声のように、それほど人の心を動かすものでもなければ、人間らしくもなく、また説得力にも欠けたものであった。

教師と教育に関して Bunyan がいっている「私は Plato や Aristotle に会うために学校へも行かず」<sup>(36)</sup>という言葉は、使徒パウロが自分自身で公言している「また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず」<sup>(37)</sup>ということばを思い起させるものである。本に関していえば、『The Plain Man's Pathway to Heaven』(平原の住民の天への道)や、『The Practice of Piety』(敬神の儀式)、はよく読んでいたし、また Fox の『Book of Martyrs』(殉教者列伝)は最も愛読したもので、獄中でも手許から離さなかった程である。それ故、この本から受けた感化も大きなものであった。しかし、あとの一冊、英語聖書こそは、Bunyan の生涯を通じて、その説教や著述を生み出す力を与え、今の世に至るまでそれを生かしてくれたのである。もし Bunyan の力量、すなわちその文学的卓越性、世代に渡る影響力、文体、単純でしかも効果的な劇化 — 霊的効果は当然のこと — にみせた勝れた才能に対して確答を求められるならば、それは唯一語〈聖書〉という答えに尽きるだろう。

Bunyan には天賦の才能が備わっていたことは否定できない。彼には独創的天性があった。その上想像力豊かで、明らかにこの世と神の国の類推をとらえるのが速かった。彼は下層階級の出身であり、世の荒波にもまれていた。だからきたないものや職人の道具に釣り合いそうな単純

な思想や発言の極意を窮めていた。この鑄掛屋には才能がなく、粗野であったということを立証する必要はない。彼はそれどころではなかったからである。彼に備わっていた想像力は聖書という種子が播かれると、それを豊かに育てる土壌のようなものであった。彼にとって聖書はあらゆる書籍中で最も真実なものであった。聖書中の人物・場面・出来事は彼のあらゆる考えの主題となるような力で彼をとらえた。彼にとっては聖書による人生とは、“滅びの町”を出発点とし、“天上の国”をその終着点とする巡礼のようなものであった。そして聖書がその巡礼中の経験に資料を提供してくれたのであった。彼の描いた絵は<善>と<悪>の間で絶えず戦われている一大闘争の写しであり、説明にすぎなかった。戦争用武器は聖書の武器であり、勝利は聖書の勝利である。Bunyanのなした貢献は計り知れない程大きい。彼は聖書が人間の経験に移し得るものであることを証明した。すなわち、彼はキリスト者の人生における信仰・決定・感動が真に人生を構成するものであり、従って文学に対しても建設的であることを証明した。その著“天路歷程”は文学史上不朽のものである。詩人 Whittier もそれを評して、「異教徒でさえそれがこの世から消えることを喜ばない」といったほどである。

#### b. 天路歷程

Maccaulayは「古くて汚れのない英語の名誉にかけて我々の文学を保証できる本、その言葉自体がいかに特有の財宝に恵まれているかを示している本、またそれが借りているものからはいかに利用されていないかを明瞭に示している本——このような本は Bunyan 以外にはない<sup>(38)</sup>」といっているが、これは歴史家が Bunyan の貧弱で小さい本——外形は貧弱であっても、内容は思想と才能とで豊富である——に与えたたぐいのない賞賛であった。同じこの歴史家は Bunyan の“The Holy War”(1682) (聖戦)<sup>(39)</sup> のことを評して“天路歷程”は例外として世にある最高の寓

意物語であるとし、また“Grace Abounding”（1666）（神恩無量）<sup>(40)</sup>は「Bunyanの信仰を告白した最大の自叙伝である」と評した。

Bunyanは英文学に関して何の知識もなかった。また学界も彼の才能には何ら貢献することもなかった。彼はそのペンを聖書のもつ流動的共感と権力の中に浸して書いた。そしてその結果がこの傑作となって表われた。それ以来彼の単純な文体、豊富な想像力、人間性豊かな話術は学界における一大驚異となった。Bunyanは生れつき才能のある想像力で聖書の中に神の国のパノラマを見た。そして見たこと、感じたことに興奮して自分の本心と想像とを書きあげた。Miltonは古典の型を変えて聖書の題目に合わせるようにしたが、抽象概念から絶縁することには成功しなかった。ところがBunyanは抽象概念に具体性の関心をよせたのであった。彼は同じ聖書の主題をとらえて、読者の前にそれを生かしたのであった。彼の描いた人物は決して忘れられるものではない。Greatheart（寛大氏）、Pliable（従順氏）、Faithful（誠実氏）、Worldly - Wiseman（俗物氏）、Talkative（饒舌氏）及びその他多くの登場人物は全てが読者の友人であり、また隣人なのである。巡礼者の重荷（Pilgrim's Burden）、困難の丘（Hill Difficulty）、解説氏の家（the House of Interpreter）、くぐり戸（Wicket Gate）、巻物（the Roll）、美わしの宮殿（the Palace Beautiful）、楽しい山（Delectable Mountains）、ベウラ（まよい）の土地（Land of Beulah）—— など、これ程躍動的で個性的なものはないだろう。巨人絶望（Giant Despair）、絶望の沼（the Slough of Despond）、ライオン（the Lions）、まぼろしの谷間（the Valley of the Shadow）—— これら全ては真実そのものである。

### c. Bunyanの想像力と聖書—— 寓話小説

聖書はBunyanにあのような題材—— それは彼の靈感である—— を与えたというだけではない。聖書はBunyanに書くことを教えた。なるほど彼は自分の仕事には機敏な想像力を働かしてはいるが、その想像力を行

使し、操作することができたのは、彼が誠心誠意聖書に心を傾けたからである。Macaulay もいうように Bunyan は聖書の〈生き字引〉であった。聖書こそ彼に純粹にして明確な英語文体を自由に駆使させてくれた恩人である。聖書が彼の想像力に栄養豊かな食糧を与えてくれた。また聖書が彼に物語や実話の価値と、冒険談やロマンの魅力を教えてくれた。多くの国とさまざまな時代の文学に開花した人生を巡礼にたとえた古くから伝わる思想は、Bunyan がそれを聖書を通して扱ったためにあらゆる時代においてごく稀にしかない大寓意物語の一つにさせる程勝れた活気と威力のある物語説教となった。「巡礼の旅は—— 少なくともそのような面が多くあるうちで—— 我々自身のものである。だから Bunyan が自分の夢の中で会った人達に我々も出会っているので、彼が描いたのは我々自身でもある」<sup>(41)</sup>。

世界文学で三大寓意物語といえ、Spenser の“Faerie Queene”( 仙女女王 )、と Dante の“Divine Comedy”( 神曲 )、及び Bunyan の“Pilgrim's Progress”( 天路歷程 ) であるが、これらは全て聖書の影響を強く受けた想像力によって創作されたことは衆知の通りである。<sup>(42)</sup> 想像力豊かな知性が聖霊の事実と信仰の体験を人類のために有用な形で再現させたいと望んでそれを力強くとらえている時、それが出来ごとや例証の題目を聖書に求めるのは当然のことである。Bunyan の“天路歷程”があらゆる文学作品の中で小説による最も完全な真実の勝利として他とは違った書き方がされているのはこのためである。用心深い作家たちは Elstow の鋳掛け屋のことを英国小説の父として話題にしてきた。少なくとも次期世紀に文学的成長をとげた英国小説は Bunyan の“天路歷程”の不朽の物語にそのきざしが見出されていたといえるだろう。それ故、その後現代に至るまでの英国小説家が、大いに聖書をよりどころにしてきたことは驚くにたりないことである。以来流行作家が聖書から題名だけを拝借しているものをあげれば数えきれないほどあるだろう。



殆どあらゆる国の言葉で翻訳され、また異った方言で語られ、カトリック教徒、新教徒をとわず、あらゆる宗教団体の間に自由に配布されて読まれた本、そして全英国キリスト教界に宗教的結束をうながした本——このような本は、文学作品として傑作であるばかりでなく、その本から生じた文学的感化力を伝える記念碑でもある。この本こそ Bunyan の“天路歷程”であり、清教徒の感情を最も美しく飾ったものである。

## 5. 他の清教主義文学を代表するもの

### a. 予言者カーライル

その後清教主義が英文学史上どのような足跡を残しているか詳細にこれをたどる必要があるが、これは改めて次の研究題目に掲げることにしよう。さて、たとえこれまでに清教主義の影響が全然この世から失なわれてしまったかのようにみえた時代があったかも知れないが、それは地下水のようなもので、当分の間は地下にもぐってはいるが、再び表面に現われてくるものであることは歴史が立派に証明している。Milton 的真剣さ真面目さと、英文学特有と信じられている決断力と誠実さとは、正真正銘、清教主義固有のものである。19世紀の清教徒中で最適と思われる代表者は Thomas Carlyle である。彼には特有の神学があったわけではないが、それにも拘らず、その激しい情熱と道徳的真面目さ、及びそのまれにみる理想主義の故に彼は同時代における精神界最大の指導者にされたのであった。また彼は、どうしてもおさえることのできないヘブライ的激情をもったユダヤの予言者とみなされた。彼は夜になると“ヨブ記”を手にして窓辺にゆき、眠りにつくロンドンの市を眺めた。聖書は彼にきまり文句ではなく語りかけた。それは彼には一大特権をもった言葉となって響いた。Carlyle は他の偉大な英人作家と同じように、知らず知らずのうちに、聖書のもつ熱意と力という深い泉の中にペンを浸して、人のために、彼の伝えんとする仕事と義務と真実の福音を書いたの

であった。

b. New England 文学と聖書

清教主義はまた大西洋を渡ってニューイングランドの文学を築くため、新世界へ深く浸透していった。初期の奇想法外な作風はここでも母国におけると同様に広くゆき渡った。しかもあらゆる面にわたって、清教主義の力はこの国に伝播された。初期ニューイングランドの家庭生活は聖書によって育かれた。従ってアメリカ文学において確保されたニューイングランドの主導権の由来に関しては、ニューイングランドの清教徒が聖書の恩恵を蒙っているということを記憶に呼び起すだけでその説明は充分なされているのである。Lowellもいうように、ニューイングランドは「敬神、文化、自由思想のあるところなら、どこの炉辺でも腰をおろす」ということが真実ならば、そこには必ず聖書があることを意味している。

Nathaniel Hawthorne はニューイングランドの清教徒を真に代表する作家であり、しかも彼が聖書からうけた恩恵は読者も充分分っている筈である。彼の強烈で真剣な風格、陰うつな清教的想像力、悪の根元を糾すため自分自身を苦しめようとする性向、<sup>(44)</sup> — これらは神の言葉と全く調和した一つの精神を表わす顕著な特徴である。Hawthorne のような作家の作品では、その主題はどんなものであっても、結果は殆ど精神的なものになっている。少くとも彼の作品の格調と表現は精神的なもの聖書的なものが極めて多い。“緋文字”にもそれは顕著に表われている。清教主義の開花を扱った小説では Hawthorne の最大傑作以上の好例を他に求めることは容易なことではないだろう。また聖書の影響を度外視してこのように強烈な精神力を表明している作品を発表した作家もさほど多くはいないだろう。

注

- (1) Thomas Bobington Macaulay: Critical and Historical Essay;  
“Essay on Milton.”
- (2) Douglas Campbell: The Puritan in Holland, England and America, Vol.I,  
XXIII.
- (3) Letters and Speeches of Cromwell. Introduction.
- (4) Critical and Historical Essays; On Puritans.
- (5) Hume’s History of England , Chapter XI.
- (6) James Russel Lowell: Among My Books, “Essay on New England,  
Two Centuries Ago.”
- (7) William Hazlitt: Lectures on the Literature of Age of Elizabeth, Lecture I.
- (8) Douglas Campbell: The Puritan in Holland, England and America,  
Vol. I. p.458.
- (9) James Russell Lowell: Among My Books, “Essay on Milton.”
- (10) セムの子アラムの子とされている地方（レバノン山付近）。
- (11) ケダル人は垂幕のある黒い天幕に住む（詩篇 120 篇 5 節）。
- (12) マタイによる福音書；第 11 章 17 節。
- (13) 詩篇；第 144 篇 1 節。
- (14) Rowland E. Prothero: The Psalms in Human Life,  
p.250.
- (15) 詩篇；第 68 篇 1 節。
- (16) William Muir: Our Grand Old Bible, p. 179.
- (17) Christopher Andersen: Annals of the English Bible, Vol.  
II, pp. 353–360.
- (18) Douglas Campbell: op. cit., Vol. II. pp. 137–138.
- (19) J.B. Macaulay: op. cit., “Essay on Lord Bacon.”
- (20) Ibid., “Essay on Southey’s The Pilgrim’s Progress, with  
a Life of John Bunyan.”

- (21) J.R. Lowell: *The Fascination of the Book*, pp. 147–148  
参照。
- (22) J.R. Lowell: *Among My Books*, “*Essay on Milton.*”
- (23) Milton: *Paradise Lost*, Book I. 1行より。
- (24) *Ibid.*, Book III. ll 333–335.
- (25) *Ibid.*, Book III. ll 510–513.
- (26) Milton: *Lycidas*, ll 172–173.
- (27) ヨハネの黙示録；第12章7節。
- (28) Milton: *op. cit.*, Book I. ll 18–31.
- (29) *Ibid.*, Book I. ll 41–45.
- (30) マタイによる福音書；第4章8～9節。
- (31) Milton: *op. cit.*, Book IV. ll 606–608.
- (32) *Ibid.*, ll 633–635.
- (33) J. R. Lowell: *op. cit.*, “*Essay on Milton.*”
- (34) Milton: *Samson Agonistes*, ll 38–41.
- (35) アモス書；第7章14 – 15節：アモスはアマジアに答えた「わたしは預言者でもなく、また予言者の子でもない。わたしは牧者である。わたしはいちじく桑の木を作る者である。ところが主は群れに従っている所からわたしを取り……」参照。
- (36) 竹友藻風訳：バニアン天路歷程（西村書店）第2部、p.309。
- (37) ガラテア人への手紙；第1章17節参照。
- (38) T.B. Macaulay: *op. cit.*, “*Essay on Southey’s  
The Pilgrim’s Progress, with a Life of John Bunyan.*”
- (39) 竹友藻風訳： *op. cit.*, p. 324. 「その構想は *Paradise Lost* にも比較せらるべき清教徒の思想が表現せられている」参照。
- (40) *Ibid.*, p.317. 「天路歷程と相並んで輝く一大傑作である……天路歷程は寓意の形をとっているが、これは切実な経験であり、

経験の深刻なことは古今の自叙伝に余り多くの匹儔を見ない・・・」  
参照。

- (41) Edwin P. Parker: Warner's Library of the World's Best Literature; On John Bunyan.
- (42) Edward M. Chapman: English Literature in Account with Religion, p. 500.
- (43) J.R. Lowell: op. cit., Essay on "New England Two Centuries Ago."
- (44) Ibid.